様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３７１１１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７８０４５９

研究課題名（和文）「居場所としての識字」と「解放のための識字」の接合可能性に関する臨床教育学的研究

研究課題名（英文）An Educational Clinical Study on Literacy Practice in Contemporary Japan

研究代表者
添田　祥史（SOEDA, YOSHIFUMOI）

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：８０５３１０８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　近年、識字実践のもつ生きがいとしての機能を評価しようという議論の高まりがある。その一方で、居場所機能を強調する中で、人間解放をめざす運動的側面が脱色されることを危惧する声もある。本研究の目的は、「居場所としての識字」と「解放のための識字」との接合可能性について、現場の「声」を整理する作業を通して明らかにすることにある。
　本研究の成果は、大きく次の２点である。第一に、現場の「声」を整理する方法論について「翻訳」という観点から整理した。第二に、北九州市における夜間中学増設運動について識字教室内外の連関を明らかにした。以上をふまえて、今後、「親密圏としれの識字実践」という理論モデルを精査する。

研究成果の概要（英文）：Some literacy education practitioners say that we have to recognize the value of ‘literacy practice as worth thriving on’. On the other hand, there is a concern that such a stance may weaken the aspect of ‘literacy practice as liberation’.
The purpose of this study is to consider possible solutions, through the voices of the literacy education movement and its practitioners.
The results of this study are twofold. First, we showed that we should shift our point of view from ‘interpretation’ to ‘translation’ in our field work. Second, we clarified the dynamism required for a grass-roots movement aiming at the further development of night schools, in consideration of the internal and external relations with the literacy education classes. Based on the above, we face the future challenge to scrutinize the theoretical model of ‘literacy practice as Intimate Sphere’ in contemporary Japan.

研究分野：成人基礎教育

キーワード：成人基礎教育　識字　居場所　解放　親密圏

１．研究開始当初の背景

国内の識字問題は、過去のものではない。生涯学習社会を標榜するわが国においても、読み書きに不自由している人は存在する。そうした中で、識字教育の現場では、日々地道に活動を継続している。

「書くことにこだわると出口がなくなる」―ある識字教育の実践家のこのことばに現場の「今」が象徴されている。十年以上、熱心に識字学習に臨みながらも、ひらがな・片仮名をマスターできない人は少なくない。そうした学習者にとっては、人間解放につながるはずの識字が、自己の能力や加齢への不安に結びついてしまうのである。

こうした識字学習者の「痛み」を共有するために現場で生み出されたものが「居場所としての識字」論である。その一方で、その一方で、居場所機能を強調する中で、人間解放をめざす運動的側面（「解放のための識字」）が脱色されることを危惧する声もある。

２．研究の目的

以上の問題関心より、本研究の目的は、「解放のための識字」と「居場所のための識字」の理論的統合をめざすことにある。具体的には、次の６つの研究課題を設定した。なお、本研究における当事者とは、第一義的には学習者をさすが、スタッフ及び活動に賛同する関係者も含めて使用することにする。

・当事者にとって「解放」とは何を意味するのかについての探究
・当事者にとって識字が「居場所」であるとはどういうことかについての探究。
・「居場所」と「解放」の概念整理。
・実践を記述・分析する方法論の研鑽
・仮設的なモデルとしての「親密圏としての識字実践」の検証
・以上をふまえた実践モデルの提示

３．研究の方法

①分析枠組み―自己変容と社会変革

本研究が想定する新たな実践モデルは、「居場所」としての識字実践に集い、学びあう中で自己が「解放」され、社会をゆるやかに変えていくイメージを想定している。

その鍵概念として着目するのが、親密圏概念である。親密圏の最狭義の定義は、「具体的な他者への生への配慮／関心をメディアとするある程度持続的な関係性」である（斉藤純一『公共性』岩波書店、2003 年）。外部で否認あるいは軽視の視線に曝されやすい人々にとって親密圏は、自尊あるいは名誉の感情を回復しながら、抵抗の力を獲得するためのよりどころにも成り得る。

本研究では、親密圏としての識字実践における自己変容と社会変革とのダイナミズムの展開プロセスについて、現場のリアリティに即して説明していくことをめざす。

②教育臨床心理学的アプローチ

本研究では、新たな実践モデルの提案を最終的な目標とするが、そのためのプロセスは徹底して現場主義を貫きたいと考えた。現場の実践者が納得しながら使える「武器」を提供しなくては、机上の空論に終わってしまうからである。

そのために臨床教育学的なアプローチを採用した。臨床という概念が新たな学問領域として特立する意義は次の４点である（庄司良信「臨床教育学の研究方法・探訪」小林剛ほか『教育臨床学序説』2002 年）。

・具体的な現実を、我が身で感受しつつ応答できる学問であること。
・癒し、演じ、導くという機能を総合的に内包した学問であること。
・ロゴス（認知）的契機とパトス（情動）的契機が統一できる学問であること。
・対等平等な対話遂行による意味構築と現実変革の契機を照射する学問であること。

調査地は、義務教育未修了者の多い都道府県からメインフィールドとサブフィールドを設定し、比較検討しながら実践モデルの生成と精査を行う。

メインフィールドは、継続的なフィールドワークを行っている釧路自主夜間中学「くるかい」（北海道釧路市）と「青春学校」（福岡県北九州市）である。サブフィールドは、「オモニハッキョ」（大阪府大阪市）、珊瑚舎スコーレ自主夜間中学（沖縄県那覇市）を選定した。主に、その地で展開されている（いた）夜間中学増設運動と識字実践との連関を明らかにすることを念頭にフィールド調査を行う。

４．研究成果

研究課題は、概ね達成できたといえる。現場の「声」を整理する研究方法論の探究まで行えたことは大きな成果である。その一方で、理論モデルとしての「親密圏としての識字実践」の検証については、まとまった成果物として発表するにはもう少し時間が必要である。本研究の成果は、大きく次の２点である。

第一に、現場の「声」を整理する方法論について検討した。「実践の理論化」という際、そこで求められている学的営為は、「解釈」というよりも「翻訳」という表現に近いような気がしていた。そこで、近年の翻訳研究の蓄積に学びつつ研究方法論として提起した。

実践の理論化をめぐる問題として、研究者が無意識に抱える＜あるべき実践像＞が実践の見方を規定していることを指摘した。それを乗り越える視座として、「実践を翻訳する」というアプローチの必要性を説いた。

「意味の等価的伝達としての翻訳」という視点からは、当該実践の意味（価値）を把握し、それをアカデミズムの言語で「等価に」

表現するのが、研究者の役割となる。実践のテクストの特性を理解するためには、「価値に対する感受性」が求められる。

「上昇運動としての翻訳」という視点からは、教育研究における実践分析とは、アカデミックな言語への翻訳作業を通じて、教育実践の志向の総体である「純粋言語」の種子を熟させることになる。ここにおいて、研究も実践も双方の存在が互いを補い合い、高めあうという新たな関係性が拓けてくる。

第二に、北九州市における夜間中学増設運動について識字教室内外の連関を明らかにした。

「解放」と「居場所」の当事者的理解及び両概念が実践的にどのように接合可能であるのかを深めるべく、識字教室内外で展開される＜ことば＞に着目したフィールドワークを継続実施した。

識字教室内の何気ない会話に込められた既存の価値に適合しない語りは、モデル・ストーリー（桜井厚）を豊富化させていく。このことは、場の包容力をもたらすだけでなく、実践や運動の方向性にも運動を与えていた。運動は、要求を勝ち取るための＜ことば＞を選択し、価値を収斂させていく。

識字教室が、複数のストーリーを並列させることで、そうした収斂化によって生じる排除問題を顕在化しやすくなる。「戦後補償としての義務教育保障」という実践や運動の方針は、形式卒業者にもひらかれた学びの場を要求する＜、ことば＞へと書き換えられていった。

以上をふまえて、今後、「親密圏としての識字実践」という理論モデルを精査していきつつ、体系化していく作業を行っていきたい。次期科研以降の課題である。

なお、本研究遂行の過程で、識字教育研究において大きな進展があり、本科研もそれに寄与してきたので追記しておく。直接的な研究成果ではないものの、本科研の間接的な成果のひとつと言えよう。

本研究のような現場志向性の高い研究において、教育実践と福祉実践を架橋する「新しい学」の誕生は喫緊の課題であった。研究と実践をつなぐ共通言語あるいは翻訳装置としてアカデミズムを位置づける。そうすることで、異なる分野の実践者同士に、研究者同士に、そして研究者と実践者とに対話が生まれるからである。

そうした問題意識のもと、本科研の遂行を通じて知り合った研究者と実践者によって、基礎教育保障学会設立の機運が高まり、2016年８月 21 日に国立国語研究所で設立大会が開催されるに至った。筆者も設立準備会世話人として携わり、学会設立後も運営に協力する予定である。

この「新しい学」の使命は、教育実践をより豊かにするためのツールや、政策を後押しするような知見を共有にある。原理・方法・政策・歴史に関するアカデミックな探求の継続的な蓄積が、実践の質向上に不可欠である。基礎教育研究の進展は、再帰的に実践や政策の深化を促す。実践のための研究というスタンスを常に根底に活動する学会。このようなアカデミズムの位置づけ方は、実践科学における「研究」とは何かを問い直す上でも非常に示唆的といえよう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①<u>添田祥史</u>「社会教育研究における実践の理論化とフィールドワーク―「解釈」から「翻訳」へ」『社会教育研究における方法論の検討』（日本の社会教育）日本社会教育学会、2015 年、査読有、掲載決定

②岩本陽児・棚田洋平・<u>添田祥史</u>「東アジアの識字教育の 20 年―研究・実践・政策・交流のこれまでとこれから」『東アジア社会教育研究』第 20 号、39-48 頁、東京・沖縄・東アジア社会教育研究所、2015 年、査読無

③<u>添田祥史</u>「識字実践がつくる／をつくる＜ことば＞」『社会教育学研究』51 巻１号、30-31 頁、日本社会教育学会、査読無、2015 年

④<u>添田祥史</u>「若者への学び直し支援の実際―釧路自主夜間中学『くるかい』の現場から」『部落解放研究』199 号、53-64 頁、部落解放・人権問題研究所、2013 年、査読無

〔学会発表〕（計３件）

①<u>添田祥史</u>「北九州における夜間中学増設運動の展開」日本社会教育学会、首都大学東京、2015 年９月

②<u>添田祥史</u>「識字実践がつくる／をつくる＜ことば＞」日本社会教育学会プロジェクト研究「社会教育研究における方法論の検討」日本社会教育学会、2014 年９月、福井大学

③棚田洋平、岩槻知也、<u>添田祥史</u>、上杉孝實「『社会的困難』を有する若年支援に関する実証研究―生活とリテラシーの実態をふまえて」日本社会教育学会、2013 年 9 月、東京学芸大学

〔図書〕（計２件）

①辻浩・細山俊男・布施利之・金田光正・矢久保学・片岡了・益川浩一・越村康英・大島英樹・<u>添田祥史</u>・丸山啓史・黒澤ひとみ『自治の力を育む社会教育計画―人が育ち、地域が変わるために―』国土社、2014 年、総頁数 224 頁

②松田武雄、東内瑠里子、圓入智仁、農中至、<u>添田祥史</u>、久保田治助、永田香織、野依智子、嘉納英明、金子満、河野明日香『現代の社会教育と生涯学習』九州大学出版会、

2013年、総頁数258頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
添田　祥史（SOEDA,Yoshifumi）
福岡大学人文学部　教育・臨床心理学科
准教授
研究者番号：80531087

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：